

今さら聞けない!? キリスト教講座 新約編(2019年度)

《個別文書について》

Q. マタイ福音書にあるイエスの系図の意味、そして他福音書への影響を知りたい。

福音書の順序

マタイ福音書冒頭の「系図」は、新約聖書を初めて手に取った人を面食らわせるものであろう。ほぼ1頁に渡って、見慣れないカタカナの名前が並んでいる。これに嫌気がさして聖書を放り出した人は歴史的にも多かったのではなかろうか。マルコ福音書やルカ福音書が新約聖書全巻の冒頭であればよかったのに…、と思う人はキリスト教徒もいたであろう。

そもそも、福音書の順序はどのようにして決まったのであろうか。これは公会議等で設定されたものではなく、慣習的に決まったもののようである。各福音書は別の時代に個別に記されたものであるから、順序が最初から定まっていたわけではない。それでも、2世紀末頃にローマで作られたとされる「ムラトリ正典目録」においてすでに、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネという現在の順序で掲載されている。正典化の過程において、ヨハネ福音書は議論の対象となった。他の三つの福音書とあまりに異なり、また神学的にも疑義が出されたからである。そのため位置的には後ろに置かれることになったと考えられる。マタイ・マルコ・ルカについては、それぞれの著者の名前を考えてみよう(なお、福音書の著者はあくまで後代に付加されたもので、実際の著者がこれらの名前であったかどうかはわからない)。この三人のうち、マタイのみが十二弟子である。つまりイエスに最も近い存在であり、よりイエスの真実を伝えていると考えられたのであろう。それゆえ、福音書群の冒頭にふさわしいとされたようである。マルコは伝説的にはパウロの弟子とみなされているが(使12:12; フィレ24など)、このマルコが福音書を書いたかどうか確証はできない。ルカもまたパウロの協力者とされる(フィレ24、2テモ4:11、コロ4:14)。かつ、ルカ福音書の冒頭では、著者(ルカ)は自分がイエスの直接の目撃者ではないことを暗に述べている(1:1-3)。もし自分が目撃者であれば、「最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに」や「わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので」とは言わず、「私自身が見た通りに」など自分の証言を強調するであろう。またマルコ・ルカはいずれもパウロの関係者であることにも注意したい。パウロ神学を重視する現在のキリスト教とは異なり、初期キリスト教においてはパウロの権威は必ずしも高くなかった。よって、彼に連なるマルコやルカの福音書がマタイよりも評価されることはなかったであろう。

マルコとルカの順序については、ルカ文書がもともとルカ福音書+使徒言行録の2部構成から成る一連の文書であることから、イエスの死と復活までにとどまるマルコが先に置かれたと推測される。(ちなみに、マルコはマタイの省略版である、という考え方もあるが、現在ではほとんど受け入れられていない。) こうして4つの福音書が並べられ、マタイ福音書は冒頭に置かれることになったのである。なお主に英国圏では、各福音書の並びからマタイ福音書を「第一福音書」(First Gospel)、マルコを Second Gospel、ルカを Third Gospel と呼ぶことがある。ただしこの呼び方は現在ではほぼ廃れており、ヨハネ福音書を指す「第四福音書」(Fourth Gospel)のみが生き残っている。

系図の目的

さて本題に戻ろう。マタイはなぜ福音書冒頭に系図を置いたのであろうか。それは「読者にとって効果がある」と著者が考えたからである。冒頭に「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(1:1)と述べられる。この言葉が系図の目的を表している。つまり、イエスはアブラハムの子孫であり、またダビデの子孫であるという主張である。アブラハムは神と初めて契約した、ユダヤ人にとって最も重要な父祖である。またダビデはユダヤ人の歴史におけるスーパースター、偉大な王として崇められる存在である。アブラハムは民族の父、ダビデは最高の国王と呼ぶこともできる。イエスはその二人の血統を引き継ぐ、偉大な存在であると主張していることになる。このことから、マタイ福音書は読者としてユダヤ人を意識していることがわかる。(アブラハムやダビデが誰かを知らない人々には、この系図は全く意味を持たないのである。)

そもそもユダヤ人は血統、つまり系図を重んじる人々である。旧約聖書にも系図が頻繁に現れる。またバビロン捕囚から帰還する際には各人の血統が確認され、自らの血筋を示せない者はその職からも排除された(エズ 2:59-63)。これはバビロン捕囚の期間中にサマリアを中心にして混血が進んでいたことを踏まえ、ユダヤ民族のアイデンティティが失われる危険を感じたためであろう。現代においても、ユダヤ人とは両親のいずれかがユダヤ人であると考えられる人が多いようである(現在のイスラエル共和国の法律では、「親がユダヤ人」か、「ユダヤ教徒である」ことが条件となっている)。マタイ福音書はユダヤ人向けに書かれたというのが定説であるが、系図もまた読者であるユダヤ人を意識して置かれたものであるといえるだろう。

系図の内容そのものについては、必ずしも旧約聖書に根拠のない人名が含まれていたり、また年代の幅がまちまちであったりするので、正確な歴史ではない。よく言及されるのは、この系図の中に4人の女性(タマル、ルツ、ラハブ、ウリヤの妻)が含まれていることである。ユダヤ社会の系図に女性が現れるのは異例であるとされる。これらの女性については、(1)罪に絡んでいるとする説、(2)異邦人であるという説があるが、後者が妥当であろう(詳しくは橋本滋男「マタイによる福音書」『新共同訳新約聖書注解』33頁参照)。また最後に「14」という数字が強調される。これはダビデを表すヘブライ文字が表す文字が14となることから、ダビデの子であることが強調されている、とする説がある(橋本、前掲書、34頁)。あるいは、ユダヤ教の完全数である7を二倍した数として、キリスト教化されていると考えることもできるであろう(黙示録の「24人」(12の二倍)の長老も参照)。3組の「14」の後にイエスが生まれたことで、新しい「14」の時代が始まったということを表しているのである。

福音書における系図

ルカ福音書にもイエスの系図が述べられている(3:23-38)。マタイの系図は、アブラハムから始まりダビデを経由してイエスに至るものであったが、ルカの系図は逆に、イエスから始まって遡っていく。14のような区分はなく、ひたすら名前が並んでいる。ここには77名の名があり、完全数7が11組あると解釈し、イエスの時代は12組目(イスラエル12部族)という新しい時代の始まりとみなされる(三好迪「ルカによる福音書」『新共同訳新約聖書注解』282頁参照)。ルカの系図に挙げられた名前はマタイのそれとは異なっており、こちらも史実の正しさを示そうとしているのではなく、イエスの血統の正当性を示そうとするものであろう。ルカの系図には女性は登場しない(3:32の「サラ」は男性名。ちなみに3:29の「ヨシュア」はギリシア語では「イエス」である)。

ルカの系図にはいくつか興味深い点がある。イエスはヨセフの子と「思われていた」という(3:23)。これはヨセフ以外の人間が真の父であるということではなく、系図の最後にあるように、イエスが「神の子」であることを示唆するものである(これは系図の直前にある天(=神)からの声「あなたはわたしの愛する子」(3:22)と対応する)。また日本語では「…アダム。そして神に至る。」と区切られているが、ギリシャ語では「…アダム[の子]、神[の子]。」となっている。つまりルカの系図においては、イエスは「ダビデの子」(3:31)や「アブラハムの子」(3:34)にとどまらず、さらに遡って「アダムの子」(3:38)であり、「神の子」であると主張しているのである。アブラハムはいわば「ユダヤ人の祖先」であるが、アダムは最初の人間であるから「全人類の祖先」と言って良いだろう。ここから、マタイがユダヤ民族向けの文書であるとすれば、ルカはそれを超え、全人類を対象とした文書であることを目指したといえる。

以上のように、マタイ福音書とルカ福音書に掲載された系図は、史実の掲載というよりも、それぞれの著者の神学、主張したいことを明確にするためのものである。その点で非常に興味深く、また意義あるものといえる。

Q. 共同書簡とは何か。

初期におけるキリスト教の拡大(1-2世紀)

イエスの復活を(おそらくエルサレムで)体験した弟子たちは、自分たちの集団を形成していった。といっても、当初は独立した集団ではなく、ユダヤ教の一派として振舞っていた。すなわち、神殿に詣でつつ(使 2:46、3:3)、しかし独自の行為として、家ごとに集まってパン裂き、つまり最後の晩餐の模倣を行っていたのである。使徒言行録によれば、ステファノの迫害の際にユダヤ・サマリアの地方に信徒たちが逃げていったとされる(使 8:1)。初期の宣教対象はユダヤ人であったが、キリスト教はいわゆる異邦人信者を急速に獲得していく(使 11:19-20)。それは小アジアやマケドニア(ギリシャ本土)など、パレスチナから見て北西部であった。これは交易等の関係で情報が伝わりやすかったこともあるだろう。ディアスポラの民であったパウロが活躍したのはこれらの地方であった。パウロは各地に教会を建てていった。もちろん、宣教活動をしていたのはパウロだけではない。アポロなどの名前も挙げられているが(使 18:24-28)、聖書には記録されない人々がさまざまな福音を伝えていったのであった。

1世紀の後半になると、各地に教会が建てられていった。それらの教会は建てた人々の信仰を反映していたはずであるが、それらの信仰内容が全て同じであったとは言えない。アポロはヨハネの洗礼しか知らなかったとあるし(使 18:25)、魔術師シモンのような誤解や(使 8:9 以下)、イエスの名を使うユダヤ人祈祷師たちにも言及がある(使 19:11 以下)。当時、まだ「正統教義」のようなものは定められていないし、定める組織体もなかった。ただし十二弟子は権威をもっており、かれらが中心となるエルサレム教会が教義的内容を随時判断していた。パウロも自分の福音理解が間違っているのではないかと考えて、エルサレム使徒会議に赴いている(ガラ 2:2)。もっともエルサレム教会自体は脆弱であり、小アジアやマケドニアの教会からの献金によって支えられているのが実態であった(2 コリ 9 章ほか)。さらに第一次ユダヤ戦争(66-73年)およびエルサレム神

殿の破壊(70年)によって、エルサレム教会は消滅してしまった。つまり教義的な判断をする中心地がなくなってしまったのである。

中心地は無くなっても、各地の教会は存在し続けており、さまざまな課題が現実发生过っていた。それらに対応するために記されたのが公同書簡であるといえる。

公同書簡の特徴

公同書簡と呼ばれるグループには、パウロ書簡でない手紙が全て含まれる。すなわち、ヤコブ書、ペトロ書1と2、ヨハネ書1と2と3、ユダ書の7通を指す。

公同書簡は、英語では伝統的に Catholic Letters と呼ばれてきた。「公同」は、ギリシャ語カトリコス(καθολικός)の訳である。『祈祷書』のニケヤ信経では「…使徒たちからの唯一の聖なる公会を信じます」の「公(会)」にあたる。また文語訳の「使徒信条」では「…聖なる公同の教会、…」と呼ばれる部分である。この語は「普遍的な」「どこでも当てはまる」という意味であることから、最近の英語では General Letters と呼ばれることも多い。

この語が示すように、公同書簡には基本的に特定の宛名がない。ヤコブ書では「離散している十二部族の人たち」、1ペトロ書では「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たち」、2ペトロ書では「私たちと同じ尊い信仰を受けた人たち」となっている。1ヨハネ書にはそもそも宛名がなく、2ヨハネ書は「選ばれた婦人(=教会のこと)とその子たち」、3ヨハネ書はガイオという個人名が見られる。ユダ書は「父である神に愛され、イエス・キリストに守られている召された人たち」となっている。(真正)パウロ書簡が特定の教会に宛てられているのとは対照的である(ちなみに、第二パウロ書簡も基本的に特定の宛名を持たない)。つまり、これらの文書は「どこでも当てはまる」内容の文書なのである。コロサイ書4:16には近隣教会で文書を回覧するよう指示する記述があるが、公同書簡も同様に、回覧されることを目的としていると言ってよい。

また公同書簡は誰がどこから発信したのかも基本的に不明である。各文書の著者とされる名前は、いずれも使徒あるいは使徒クラスの名前であることに注意しよう。「ヤコブ」は十二弟子ではなく、「主の兄弟ヤコブ」であるが、イエスの復活後にイエスグループに加わったとされる。イエスの親族としてエルサレム教会で重んじられ、リーダーシップをとっていた(使徒会議で判断を下すのはこのヤコブである。使15:19)。「ペトロ」「ヨハネ」は十二弟子である。「ユダ」は裏切り者の方ではなく、やはり十二弟子の一人である(ルカ3:16。なおマタイ・マルコのリストにはこの名はない)。文章の内容から見て、公同書簡が書かれたのは1世紀末前後であり、これら名前を挙げられた使徒が実際に書いたとは考えられない。公同書簡は使徒の名を借りた文書であり、実際に執筆したのは他の(無名の)誰かである。なぜ使徒の名前が用いられているのか。それは「読んでもらいたいから」である。無名の著者の手紙など、誰が顧みるだろうか。ここはやはり著名人、しかも権威ある十二弟子の名前を用いることで、これらの手紙に書かれた内容を読み、各地にいるクリスチャンたちを励まし、指導しようとしたのである。人は権威になびきやすいというのは、今も昔も同じなのであろう。しかしゴーストライターになりながらも、教会のために働こうとする(無名の)著者たちの熱意には感銘を受けるのではなかろうか。

ヤコブ書

各文書の思想について簡単に触れておこう。ヤコブ書は先に触れたように、エルサレム教会のリーダーである「主の兄弟ヤコブ」が書いたものとされている。なぜヤコブの名を使ったのであろうか。ヤコブ書は「律法」を重んじることを勧める文書である。「エルサレム教会」は、主にユダヤ人で構成され、ユダヤ教の習慣を色濃く残していた教会であった(使徒会議の議論も参照)。であれば、律法を重んじようとするヤコブ書の実際の著者にとっては、エルサレム教会の指導者ヤコブこそこの内容にふさわしい人物と考えたのであろう。

ヤコブ書の記述として、上手なたとえなどを通して具体的な教会の状況がよく見えることが挙げられている。「律法重視」というヤコブ書の思想は、ルターが批判するところでもあるが、しかし実際に挙げられた例を見ると必ずしも空虚な「律法主義」では無いことが分かる。たとえば 2:14-17 では、行いの伴わない信仰が人を救わない例を挙げている。物が不足している人に言葉をかけるだけで現物を与えないなら何になるのか、というのである。この例が適切かどうかという問題はあるが、なかなか痛烈な批判である。これはおそらく著者の教会で実際に起こっていたことなのであろう。ヤコブ書の批判は、口先だけの隣人愛ではなく実行せよ、ということになる。これはイエスによる「良きサマリア人のたとえ」を想起させる。このような意味で「律法を行え」というのであれば、納得できるのではないだろうか。

またヤコブ書の主張として、富を持っている者への強い批判がある。これは主に不正な手段によって富を得た者たちに対する警告であり(5:1-6)、また富のはかなさを訴える(1:9-11)。また財産家に対する批判だけでなく、その周りの人々の応対にも批判がなされる。2:1-4にある、財産家を手厚く迎え、貧しい人には厳しい態度をとるといった状況もやはり、著者の教会の現実であったのだろう。ヤコブ書は、「隣人愛の実践」という点において律法の行いを勧めていることができる。それはイエスに通じるものと言えるだろう。

1、2 ペトロ書

二つのペトロ書は、新約聖書の中でも優れたギリシア語が用いられているとされる。また背景にある時代状況には広範な地域における迫害が想定され(1 ペト 1:6-7; 2 ペト 3:3-7)、史的ペトロが生きた時代とは異なっている。これらが著者はペトロ以外であることの主な理由となっている。

それぞれに見られる特徴的な思想にひとつずつ触れておこう。1 ペトロ書 3:19 には、「霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました」とある。これは十字架によって死んだキリストが、陰府に降っていき、そこで福音宣教を行っていたということを述べている。この「捕らわれていた霊たち」とは、「ノアの時代」に神に従わなかった人々と説明されている(3:20)。つまりイエス以前の「死者たち」のことを意味している。この記述の背景にあるのは、イエス以前に死んでしまった人たちは福音を聞いて救われることはないのか、という問いである。卑近な例をあげれば、「私はイエスの福音を聞いて信じ救われた。でも祖父母はイエスが生まれる前に死んでいるから福音を聞くことはできなかった。私と祖父母は、同じ天国に入れぬのか？」ということである。キリスト教の福音は、歴史的な存在であるイエスによって与えられた救いであり、歴史的な時間に制約されている。それゆえ、イエス以前の人々はどうなるのかが問われることになってしまう。1 ペトロ書の記述はこれに答えるものである。つまり「キリストは死んだ時に、すでに死ん

だ人たちの世界に行って福音を伝えてきた。だから(それを聞いて信じた人は)大丈夫」、となる。(キリストが陰府にいたのはたった3日間だが、その間に宣教者も陰府の国に誕生していて、今も宣教活動を続けているのであろう。キリストは死んでいる間にも働かされていることになり、大変ご苦労様なことである。)ともあれ、死者への宣教という話題はただの空想の産物ではなく、具体的な信徒たちの問いがあり、それに対するものとして生み出されたものといえる。(なお新約聖書において、死者への宣教という話題はここにしか現れない。)

2 ペトロ書3章では、再臨の遅れに関する問題が扱われている。3:4にある、「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ」という問いが、教会内外から寄せられていた。最初期キリスト教は、非常に強くイエスの再臨を期待していた。それは信徒たちがまだ生きている間に起こるはずだったのである(1テサ4:15-17)。ところが第一世代の信徒たちは死に、その後の信徒たちも死んでいく。2ペトロ書が執筆されたのは150年頃と考えられているが、その頃にはもはや再臨は現実のものとはとても信じがたいものになってしまっていたであろう。しかし教会は再臨を主張していたため、何らかの説明を考えねばならなかった。そこで出てきたのが、「一日千年論」とでも呼ぶべき考え方である(3:8-9)。すなわち、神とこの世界とでは時間の流れが異なる、という。神の世界の1日は、人間世界での千年間なのである。人間が千年経ってしまったと考えても、神のもとではまだ1日しか経っていないわけであるから、神は決してさぼっているわけではない、というわけである。(ユダヤ教の伝統を引き継いでいるとすれば、7日目=7千年目に神は再臨を実行させることになるのかもしれない。)さらに、一人も滅びないように神は待っているのだ、とも説明される。もともとこの論法によれば、日々新しい人間が生まれてくるわけであるから、神はいつまでも待たねばならないということにもなってしまう。いずれにせよ苦しい言い訳なのであるが、しかしそれも教会の現場からの問題提起に対して、教会指導者たちが必死に考えた回答ということになる。その努力には敬意を表すべきであろう。また終末時の様子についても、現在の天地は滅ぼされることになっている。実のところ、このような世界の更新はユダヤ教の伝統的思想では一般的ではない。ユダヤ教では、現在のこの世界は「良い」のであり(創1章)、この世界の中によい指導者=メシアが現れ、神による支配が行われるのがこの世界の完成なのである。キリスト教もごく初期の段階ではそれを引き継いでいたらしい(1テサ4章。なおマルコ13章はダニエル書のモチーフを引き継いだものと想定される)。世界更新というモチーフは、大規模な迫害の中で「もはやこの(悪の)世界ではどうにもならない」といった意識から生まれてきた、キリスト教的なものといえる。

1、2、3 ヨハネ書

1ヨハネ書は、ヨハネ福音書と共通のモチーフが多く含まれているため、同じ共同体から生み出されたものと考えられている。福音書がまず書かれ(90年頃)、1ヨハネ書が書かれた(100年頃)というのが一般的な見解であるが、1ヨハネ書の方が先であるという意見や、福音書が書かれ編集されている期間に手紙が書かれたという説もある。1ヨハネ書は手紙というよりも説教的なもの、内部向けの文書とみなされている。本書の基調となるのは「相互愛」である。有名な「神は愛です」(1ヨハ4:8)もその流れの中に置かれている。ただし、この相互愛は内部向けのものである。広く人々同士が愛し合ひましょう、というのではなく、共同体の内部で互いに愛し合おうと主張している。それはなぜか。1ヨハネ書の背景には、共同体の分裂が想定される。2:18-20には「反キリスト」(アンチ・キリスト)が「私たちから去って行きました」とある。それらの人々は「もともと仲間

ではなかったのです」と述べられるが、これはどう考えても残った者の論理、つまり「仲間割れをして、出ていった者は間違っており、残った者が正しい」という自己正当化である。分裂を経験して動揺している共同体を安定化させることは、指導者の重要な使命である。そのために、残った者たちの結束を強めねばならない。ゆえに、残ったメンバー間の相互愛が強調されるのである。そうして共同体の動揺を抑えようとしたのであろう。相互愛は単なる理想の表現ではなく、共同体の現実を踏まえた切実な勧めだったのである。なお共同体の分裂にはヨハネ福音書にも見られ、ヨハネ福音書が(特に14-16章の告別説教において)相互愛を強調するのも同じような背景が存在するからであると推測できる。

2、3ヨハネ書もまた、共同体の困難な状況が背景にあると考えられる。2ヨハネ書では「反キリスト」に言及がある(7)。また3ヨハネ書ではディオトレフェスという人物が「指導者になりたがっている」とあり、既存の秩序を変えようとする動きが推測される。なおヨハネ文書に見られる相手への批判は、あくまで著者の共同体から見たものであることに改めて注意しておきたい。著者の立場が絶対的に正しいということはなく、あくまで片方の立場からの見解であることを忘れてはならない。新約聖書文書の時代においてはまだ「正統教義」という概念は確立していないのであり、さまざまな(時には矛盾する)見解が新約聖書には含まれているのである。

ユダ書

ユダ書はほとんど注目されることのない文書だろうが、内容としては迫害に対する批判や敵への警告が中心であり、他の公同書簡と共通する部分が多い。特に2ペトロ書とは共通する内容が多く、ユダ書を参考にして2ペトロ書が書かれたと考えられている。14-15にある引用は旧約偽典のエノク書からのものであり、旧約聖書の正典範囲が定められる(1世紀末)よりも前にこの文書が書かれていたことを示している。

以上のように、公同書簡は諸教会に共通する状況を踏まえ、信徒たちに励まし・勧告・警告を行おうとする書簡群である。これらを通じて、1世紀末から2世紀初めの頃の教会の様子を知ることができる。原始キリスト教信仰の誕生から時を経て、さまざまな新しい状況に向き合っていく教会の苦悩は、私たち現代の教会にも共通するものがあるかもしれない。書簡の向こうにいる、私たちと同じ信徒の姿を探してみるのも面白いであろう。

Q. 黙示録をどう読めばよいか。

黙示文学とは何か

「黙示」という言葉はギリシア語アポカリュプシス(Ἀποκάλυψις)の訳である。この語は「隠れたものが明らかにされる」ことを意味する。「啓示」とも訳されるが、聖書においては特に「将来起こるはずのこと」の説明について「黙示」が使われている。

黙示文学は黙示がテーマになっている文書であり、第二神殿期以降、ヘレニズム期において作られ始めた。紀元前2世紀～紀元後1世紀頃の間には流行したが、それはヘレニズム王国やローマによってパレスチナが支配されている時期である。これら他民族の支配に対し、物理的な反乱(代表的なものはマカベアの反乱)の他に、黙示文学によって抵抗意思の表明がなされたのであ

敵は強大であるが、最後には神の介入があり、味方が勝利するという物語によって、人々を励まそうとしたのである。現存する支配者が敗退するという内容であるから、直接的な人物描写などは難しい。よって、幻などのイメージが多用されることになる。例えば旧約正典には「ダニエル書」(前174年頃)があるが、これはシリアのアンティオコス4世(BC215?-163)によるパレスチナへの圧政を踏まえたものであるとされる。ダニエルはペルシア時代(捕囚期、BC6-5世紀)の人物であるが、それに紀元前2世紀の状況を重ね合わせたのである。それは、ペルシア時代には存在しない国名(ギリシア、ローマ)が述べられることから分かる。また旧約偽典には「バルク黙示録」「第四エズラ書」などの黙示文学がある。黙示文学は必ずしも聖書的とは言えない幻想的な内容が含まれるため、正典には取り入れられにくかったようである。

新約聖書では「ヨハネの黙示録」が黙示文学の代表であるが、その他に、マルコ福音書13章(「小黙示録」と呼ばれることもある)、2ペトロ書3章など、黙示的な内容をもつ部分が知られている。新約外典には「ペトロ黙示録」「パウロ黙示録」などがある。いずれも日本語訳(『新約聖書外典』講談社)がある。これらには、地上で暴虐を振るった人々の地獄における運命が詳細に述べられており、一種のエンターテインメントとして読まれていた可能性もある(天国の描写もあるが概して簡潔で、地獄の描写が詳しい。天国はあまり書くことがないところなのだろうか)。(なお「ペトロ黙示録」はダンテ『神曲』にも影響を与えているとされる。)

ヨハネ黙示録の背景

ヨハネ黙示録(一つしかないので単に「黙示録」とも呼ぶ)は新約聖書における代表的な黙示文書である。90年頃の作と考えられており、ローマ帝国によるキリスト教迫害を背景としている。そもそも著者ヨハネ(他のヨハネ文書とは別著者)自身、パトモス島に島流しにあっているのである(1:9)。著者はおそらく小アジアの教会の指導者であり、自分が関わる7つの教会(いずれも小アジアにあり、互いに隣接。右地図参照)に向けて励ましの手紙を送っている(2-3章)。



5章には天上における神の前に「子羊」が現れるが、それは7つの角と7つの眼を持つ奇怪な生き物である。これが「屠られたキリスト」であるという。つまり十字架上で死んだイエスが、犠牲の子羊という形で神格化されているのである。この子羊が7つの封印のついた巻物を受け取り、その封印を開くたびに天変地異が起こるといのである(6-10章)。これらの天変地異の描写には空想的な部分も多いが、昔の人々が知っていた気象現象なども含まれているかもしれない。たとえば6:12の「月は全体が血のようになって」は月が地表近くにある時に観察される現象である。また9章にある星が落ちてくる描写は、隕石の落下を彷彿とさせる。もちろん表現には誇張があるものの、個々の現象そのものは人々の経験を踏まえていることがありうるかもしれない。なおこの中で、殉教者たちの姿が現れる(6:9-11)。しかも殉教はまだ続くことが述べられている。

13章には有名な数字「666」が述べられるが、これはローマ皇帝のネロを指すことが定説である。皇帝ネロを表す単語の文字が表す数字を合計すると666になるのである(なお写本によって616としている場合があるが、その場合も「皇帝ネロ」の意味になる。その場合は50にあたるヌンが一つ減る)。これは一種の数字占いであり、現代の日本でも「ユダヤ数秘学」のようなものはこれに類似したものである。

Nero Caesar
 נרוקסר
 נ = 200
 ס = 60
 ק = 100
 ר = 50
 א = 6
 נ = 200
 ס = 50
 Sum: 666

ローマ帝国は「バビロン」、ローマ市は「大淫婦」という形で描写される(12, 17-19章)。ダニエル書も捕囚時代の物語を利用していたが、ここでも「バビロン」が用いられているのは、バビロン捕囚がユダヤ人の歴史にとっていかに強烈なインパクトを持っていたかをよく表していると言えるだろう。ともあれ、ローマも滅ぼされるはずであるから、今の迫害を頑張っ乗り越切れ、と読者を励ましているのである。

20章では神の最終的な勝利が語られる。そして、死と陰府が火の池に投げ込まれるという。これは死の克服という人類の基本的な問題の解決である。21章において、最初の天地は消え去り、新しい天地とエルサレムが与えられるという。これは新たな天地創造であり、「世界の更新」モチーフである。22章ではイエスの再臨が繰り返し主張されており、これが重要なテーマであることを示している。

このように、黙示録は世界の将来を幻のように語る文書であり、1世紀末当時の迫害等の困難からの解放を願う人々の期待および励ましを述べた文書である。当時の歴史状況や価値観の枠内で語られたものであって、黙示録の記述をそのまま現在の状況に当てはめたり(災害発生時などにしばしば見られる)、将来この世界で起こるはずであると考えたりするのはふさわしくないであろう。しかしその文書の向こう側にあった、当時の信徒たちの苦難や願いなどに思いを向けることは、私たちの生き方にも何らかの光を与えることができるかもしれない。

黙示録については、佐竹明の注解書が出版されている(新教出版社)。以前2巻物であったが、増補されて3巻物となっている。(以前の「上巻」が新しい「中巻」になっているので、要注意。) この注解はドイツで発行されているマイヤー(Meyers)注解叢書にも収載されているが、ドイツ語版は430頁、日本語版は1200頁であって、ドイツ語版はシリーズ物のページ数制限のためかなり簡略化されているという。つまり、日本語版の方が注解の全貌を知ることができるという珍しい例である。いずれにせよ、世界的な水準の注解を日本語で読めることは大変ありがたいことである。(ちなみに佐竹明氏は1929年生まれで90歳。現在第二コリント書の注解を執筆中(8-9章は既刊)。)

以上

